

報告：シンポジウム「AT 降灰以前の石器文化」（石器文化研究会主催）

石器文化研究会主催のシンポジウム「AT 降灰以前の石器文化」が、1991年4月13-14日の2日間にわたって東京都江東区総合区民センターで開催された。石器文化研究会（会員約80名）は、関東在住の旧石器（先土器）時代研究者を中心に1985年に発足し、相互の研鑽と情報交換の場としてほぼ毎月例会を行なうかわら、1988年・1989年に討論集会（1泊）を開いてきた。それらの成果は石器文化研究1・2（石器文化研究会、1988・1989）にまとめられている。今回のシンポジウムはその総決算ということで、発足以来のテーマである関東地方のナイフ形石器、剝片剝離工程、石器組成、石材組成に関する諸問題を『石器文化の変遷』というテーマに集約して全国規模での対比が試みられた。なお、シンポジウムの内容は、石器文化研究3（石器文化研究会、1991）に集録されている。

シンポジウムは4部構成で、46名のパネラーによって23のサブテーマ（本誌第7号p2参照）の報告があった。第1部「関東地方における石器文化の変遷」では、南関東の各台地と北関東・東海における石器群の変遷過程をまとめ、第2部「石器文化の内容と評価」では、ナイフ形石器・剝片剝離工程・石器組成・石材組成を南関東中心の台地間対比、自然災害との関連について、第3部「日本列島内の様相対比」では、関東地方での石器群の変遷を軸に列島内対比を試み、第4部「『AT 降灰以前の石器文化』の諸問題」では自然環境とのかかわりに留意しながら、これに対する考古学的視点の設定を試みた。各部には討論時間が設けられたが、パネルディスカッション形式であったため壇上のパネラーの発言が中心で、時間の制約もあって会場からの討論参加がほとんどなかった。これは石器編年が未完成の段階であるだけに残念であった。

シンポジウムのテーマは、南関東におけるATよりも下位の石器群の変遷を確認し全国的に対比を試みることであり、石器群の変遷と自然環境の変遷に対応するの可否かという問題も加えて、自然科学の研究者も加えて環境と文化変遷の接点を模索して行こうというものであった。パネラーの中で自然科学関連の報告は、柴田 徹氏ほかによる「石器石材の変化」、筆者による「石器文化の変遷と自然災害」、辻誠一郎氏による「自然と人間—AT前後の生態系をめぐる諸問題」の3報告があった。辻氏は「約2.8万年前にはじまった気候の寒冷化は針葉樹の拡大・南下をもたらした針葉樹林化をもたらしたが、その終末期におけるAT噴火によって気候の寒冷化が一気に促進された（石器文化研究3より抜粋）」と考え、植生の変化が相互作用を及ぼしあう他の要素についても検討する必要がある、特に人間に関する豊富な情報の提供を切望された。また、筆者は降下テフラ・泥流・火砕流・津波・地震など過去7万年間の自然災害を挙げて、石器文化の変遷との対応を模索した。しかし、お互いに歩み寄ろうとする姿勢は見えてもうまく噛合っていないもどかしさを感じた。石器研究の現状はおおまかな石器群の変遷をとらえることはできても、より細かなオーダーでの把握（南関東でいえば火山灰の1噴火ユニット毎の石器群の変遷の把握）が出来ない状態である。また石器群の型式もなかなかグルーピングが困難な状況にある。これらの石器の諸問題を解決するまでは古環境との接点を求めるのは難しいのかもしれない。しかし、辻氏の言葉にもあったように古環境研究者は人間に関する豊富な情報の提供を切望しているのである。

従来、自然環境研究と人類文化研究は相互に一方的あるいは部分援用的であり、共同研究とは程遠い状態であった。シンポジウムの中で、「今後の発掘調査の中でこれらの環境情報を問題意識に入れて行こう」という考古学サイドからの発言があったように、この会が両分野の共同研究への道を拓く契機となればと期待する。

拙文を書いている今、折から雲仙岳の火砕流が麓の集落を襲い、熱風と火山ガスによる死者も出ている。5万年前の南関東西部は箱根火山の火砕流に一飲み込まれている。自然環境の変化は何らかの形で石器文化に影響を与えていることは間違いない。ただし、安易な環境決定論に陥らぬよう今後の研究を進める必要がある。

（上本進二）